

宮城県農業協同組合中央会第六代会長

## 駒口 盛

# 日本農業の激動期に 道を照らした 気骨のリーダー

【こまぐち さかり】

- 
- 1928(昭和3)年 7月15日、南郷町  
(現美里町)に生まれる
- 1943(昭和18)年 農業に従事
- 1957(昭和32)年 南郷町農業協同組合理事  
宮城南郷農協組合長、みどりの農協  
会長を歴任
- 1987(昭和62)年 宮城県農業協同組合中央会第六代会長
- 1990(平成2)年 全国農業協同組合中央会理事  
全国農協中央会水田農業確立対策  
本部長
- 1993(平成5)年 宮城県農協中央会・県信用農協連・  
県経済農協連・県共済農協連の共通  
会長
- 2012(平成24)年 1月5日死去

## 三二歳の若さで南郷農協の専務に選出

「あの家もこの家も家宅搜索を受けた。これでは戦時中の米の強制供出と同じだ」

戦後の食糧難時代に行なわれた米の強制供出は、占領軍の權威を嵩にきた「ジープ供出」という言葉があったほど苛酷だった。義憤に駆られた南郷村の日本農民組合青年部（以下日農青年部）のメンバーは、一九四八（昭和二三）年初頭のある夜、村役場に乗り込んで米供出の強権発動に抗議する。

「供出米の割当そのものがおかしい」「地方事務所のやり方は人権を無視している」  
地方事務所長と談判し、ようやく違法な家宅搜索の非を認めさせた。その青年集団のなかに二〇歳の駒口盛の姿もあった。

鳴瀬川沿いに広がる南郷の水田は、町面積の四分の三を占め、積雪の冬、耕土の春、早苗の夏、黄金の秋と色を変え、平野を彩った。農業の隆盛は住民の生活の繁栄を意味した。

戦時中のくびきから放たれ自立性を高めた農家は、新しく誕生した南郷村の農協に期待を寄せ、日農青年部のメンバーも自分の家のように農協へ出入りして事業に協力する。農協の定款作成委員会に参加した駒口も、先輩の指導を受けながら農協運動に自分の進路を見出していた。村を襲った大水害を乗り越え、新しい革袋には新しい水をと農協文庫を開設し、青年部を設立した。町制が施行された昭和二九年からは共済

事業に取り組んだ。

昭和三五年に駒口は南郷町農業協同組合（現JAみどりの）の専務に選出される。三二歳の若さでの抜擢だった。

## 月給貯金農家と借金肩代わりで信用事業の基礎を築く

一年単位で暮らしを営む専業の米作農家にとっては、秋に収穫した米の代金が年間所得のすべてだった。そこから借金を返し、正月やお盆の準備をし、残りを生活費に充てるのだが、最も物入りな肥料や生産資材・労賃などの春耕資金は借金に頼るしかなく、ふたたび借りては秋の米代金で精算した。毎年その繰り返しだった。

駒口はこの悪循環を改善するため、「月給貯金農家」と農家の借金を農協が肩代わりをする仕組みをつくる。ちょうど宮城県信用農業協同組合連合会（以下県信連）が自営農家の育成をめざして「月給貯金制度」を呼びかけていた時期でもあった。

農協に年一回の米代金を預けた農家は一定の生産費と税金を除いて残りを一二等分し、毎月一定額を支出して生計を維持する。いわば「月給取り」の暮らしで家計の安定を図ろうとする試みで、農協も積極的に月給貯金農家への加入を奨めた。

問題は借金の方だった。農協が融資に消極的だったため、農家は資金の不足分を高利貸しから調達した。駒口自身も「借金農家」で、返済に追われる辛さを知っていた。

南郷農協が昭和三〇年に県内一位の一億六千万円の貯金を達成していたこともあり、駒口は「借金は農協から」と呼びかけて、借金の肩代わり、つまり高利貸しから農協への借り換え運動を進める。

しかし農協の理事たちはこれに強い難色を示した。県信連から借りる肩代わり資金には農協理事全員の個人保証が求められたからだ。組合員が返済できなければ代わりに理事が県信連に支払わなければならない。議論は紛糾したが、最終的には駒口が立案した「月給貯金農家制度を活用し、農協が営農指導から生活指導まで対応して借金を返済する」との計画が通り、実行されることになった。

産みの苦しみはあったが、この取り組みは南郷農協の「信用事業」の基礎になった。さらに農家の収入を増やすため駒口は、米作・養豚・野菜栽培の複合経営を推進する。米づくりでは水稻営農団地を設置して集団栽培を行ない、生育状況を揃えてイモチ病の町内一斉防除を実現した。養豚では専任指導員の増員や仙台に食肉直売所を出店するなど振興を試みた。養豚事業はその後輸入自由化などで縮小したが、生産者グループによる手造りハムの加工工場設立へと発展した。野菜づくりは昭和四〇年代に減反政策の一環としてミツバ栽培を開始、昭和五二年には駒口が「夢のまた夢」と言った販売実績五千万円を挙げるに至った。

貯金・貸付の「信用事業」から派生した系は、こうして生産・販売という「経済事業」へとつながったのである。

## 時勢はもう量から質の時代へ来ている

終戦後、食糧事情がひっ迫するなかで日本は大規模な土地改良や用排水機場の整備などに国を挙げて取り組んだ。「もはや戦後ではない」と言われた昭和三〇年代、一人当たりの白米消費量は一日ご飯茶碗五杯に達した。日本は高度経済成長時代へと突入し、出稼ぎが増えた農村では農業機械がじいちゃん・ばあちゃん・かあちゃんのお三ちゃん農業をカバーした。宮城県は「部落ぐるみ米増産運動」を提唱して、生産拡大に力を注いだ。あぜ道に立つ「部落ぐるみ米増産運動」の旗は、農家の意欲を駆り立てるに十分な掛け声だったろう。

しかし国民の主食である米を積んだ船は、昭和三〇年代半ばから政府の針路変更によって厳しい航海を強いられるようになる。

駒口は農協人生の大半を、この船のかじ取りに費やした。

一九六一（昭和三六）年七月、農業界は、河野一郎農林大臣の自由米構想に足元を揺さぶられる。自由米構想は、日本の食糧政策の柱である「食糧管理制度」（以下食糧管理制度）を改悪するのに等しい、そう捉えた全国の農業団体は反対運動に立ち上がった。

河野大臣来仙時には、県内はもとより近県からも農業関係者や農協組合員が大勢集まってシユプレヒコールをあげ、自由米構想にノーを突きつけた。全国農業協同組合

中央会（以下全中）をはじめ全国の農業団体の勢いに押されて構想は流れた。しかし、この後一〇年を待たずに農業政策は、政府管理米から自主流通米へ、増産から減反政策へと大きく触先の向きを変えるのである。

農政のターニングポイントに立った駒口は、時代の流れに抗おうとする農協組合員と心情を共有しながらも大局を見ていた。

昭和四五年、全中が自主流通米制度の反対運動を展開したときのこと。宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）も運動の先頭に立って闘ったが、農林省の見切り発車で制度は動き始める。一方、制度に是是非非で対応した宮城県経済連は、このときすでに全国のトップを切って自主流通米を出荷する準備を整えていた。その先手必勝の奇策を打ったのが駒口だった。

駒口は当時のことを「時勢はもう量から質の時代へ来ている。いったんそのような方向にいったら確実に消費者の情勢は変わると思っていた。幸いにも宮城県にはササニシキがある。一歩先駆けた方が絶対勝つ。そのような気持ちだった」と語っている。

減反政策にも同様に、「一年前まで増産運動の旗振りをしていたのに減反政策が始まるのはいたたまれなかった。反対運動が起きるのは当然だった」としながらも、いつまでも食管制度を守るための農政運動でいいのか、新たな発想が必要ではないかと自問自答するようになっていた。

## 農業の歴史が次々書き換えられた時代に

「会長は米に人一倍強い思い入れを持っていた」。県中央会の安齋明修はそう回顧する。会長とは駒口のことだ。米どころ南郷の出身で、宮城がササニシキの産地であることに誇りを持っていた。米は農協運動を推進する心の拠りどころでもあったろう。しかし……。会長は農協人生の後半で、食糧制度の見直しや米の部分自由化など自分の気持ちとはまったく相反する局面に巡り合ってしまった」と安齋は言う。

昭和六二年、駒口は政治に明るくリーダーシップにも優れていることから、県中央会の第六代会長に選出される。また一九九〇（平成二）年には全中の水田農業確立対策中央本部長に就き、J Aグループ米対策の全国の代表という重責を担う。

農業にかつてない試練が降りかかっていた、まさに激動の時代だった。

牛肉・オレンジ輸入自由化など農産物の市場開放を求めていたアメリカの矛先は、昭和六一年ついに米へ及び、世界貿易機関のウルグアイ・ラウンド交渉に引き継がれる。

J Aグループは米輸入自由化阻止を掲げて反対運動に立ち上がるが、平成五年、全国平均作況指数七四の大冷害を契機に米不足が露呈し、「平成の米パニック」が発生。作況指数三七の宮城県は県外に一俵の米も出荷できず、営々と築いてきた宮城県米市場をたった一年で失ってしまう。

緊急事態を受け、政府は米の輸入に踏み切る。

そこからは一気だった。国内消費量八パーセントのミニマムアクセス米受入れ、国による自主流通米の全量管理、食糧制度の廃止と新食糧法の制定・施行と、日本の農業史が次々に書き換えられていった。

農業の未来を信じて身体を張ってきた駒口にとって、この歴史的な大転換はどんなに悔しかったことか。愚痴こそ言わなかったが、ことばの端々に「農協も組合員も生産調整に懸命に応え、米を守ろうと頑張ってきたのに、なぜ世の中は無情に変化してくのか」、そんな無念さが滲み出るのだった。

駒口は、水田農業確立対策中央本部長として平成六年度以降の米づくり対策を立案。三年間で最低一五〇万トン以上の在庫造成や作付面積の拡大などの要請をとりまわって運動を展開し、政府から転作面積の削減を取り付ける。

激変する農業環境は、農家はもちろん農協の存立基盤も脅かすものだった。県中央会は、農協の生き残りをかけて「一一広域農協合併構想」を進める。駒口は先頭に立って各農協を督励して回り、まず地元大崎地区一〇農協の合併による「JAみどりの」発足で道を開いた。



## 実務を知って、理念を追う

台東区鶯谷にあった県JAグループの宿泊所を、駒口は上京の際の定宿とした。県中央会や農協の職員も、米価運動や関係省庁との会議などで上京したときは鶯谷の宿泊所を拠点に活動してまわった。

若い職員にとって駒口は雲上人だったが、本人はいたって気さくで宿泊所で一緒になるとよく酒を酌み交わした。駒口と行動をとにもすることが多かった安齋もその席に加わり、駒口の話に耳を傾けた。

「米の話、農協の話。日本の農業政策の背景に何があるのか、情報を豊富な知識で分析し、若い職員も分かるようにかみ砕いて教えてくれた」

語り口は熱く、「原因と結果を見極める」と諭された。起きたことを国や政治家のせいにはせず、なぜそうなったか、さらに掘り下げたところで現状を分析し、安齋たちにその構図を絵解きしてみせた。気骨にあふれ、ぐいぐいと部下を引っ張っていく、そんなリーダーだった。

駒口は農業を通して協同組合はどうあるべきかをずっと追求し続けてきた。

「農協は、いわゆる実務を知って理念を追う、というかたちにしなければならない」それが座右の銘だった。『理念』の重要性は近藤康男の『貧しさからの解放』に、『実務』の大切さは東畑精一の『協同組合論』に学んだという。

若いころ、設立に関わった南郷農協がたちまち苦境に陥るのを見て、「農協の経営は生易しいものではない。理想だけを追って実務を知らないではダメだ」と痛感した。正しいと信じる自分の理論も、それを超える社会の動きで容易に政治経済の流れに呑み込まれてしまう。そうした体験から、農協は理念を追い求めながらも社会や政治の変化に耐えうる体力を身に付けて置かなければならないと考え、実践しようと努力した。

また、県中央会に「市場競争の進むなかでは、協同の精神」をどのように發揮していくか、協同の精神に制度的にどう応えていくかがこれから大事になる」と期待を寄せた。

「この政策はまだまだこれからだから、あんなたちに頼むぞ」と若い職員たちに託した希望は、いまでも消えずに難局を照らす道標となっている。